

書字に関する調査をもとにした国語科書写における 用筆についての一考察 (2)

衣川 彰人

国語教育講座

A Study on the Handwriting in Japanese Language Penmanship Based on Survey on Writing Characters (2)

Akihito Kinukawa

Department of Japanese Education, Aichi University of Education, Kariya 448-8542, Japan

はじめに

平成 29 年 3 月に改訂された小学校学習指導要領の第 3 学年及び第 4 学年の書写に関する指導内容には、「毛筆を使用して点画の書き方への理解を深め、筆圧などに注意して書くこと」とある。点画を書く際の用筆についての学習が従前にも増して重要視されることとなり、低学年においても、「水書用筆等を使用した運筆指導を取り入れるなど、早い段階から硬筆書写の能力を高めるための関連的な指導を工夫することが望ましい」とされるなど、より一層の毛筆や水書きを用いた用筆の学習の充実を図ることが求められている。こうした、毛筆や水書きによる点画の指導について考えていくためには、まず、学習者が点画についてどのような捉え方をしているかを知ることが必要と考える。そこで、教員養成大学で書写教育について学ぶ学生に対して、書字に関する意識と用筆の現状についての調査を行った。今回は、その分析結果をもとに、毛筆で点画を書く際に抱く意識がどのようなことがもととなって起こっているかについて探りながら、今後の書写における用筆指導の在り方についても考えていきたいと思う。

1. 書字に関する調査の実施について

(1) 調査対象および調査内容と方法

今回の調査では、本学にて国語（書写を中心とする）の免許取得のために開講している「書道演習 I~IV」を履修する学生を対象に、基本点画を書く際の運筆を動画撮影するとともに、「書字に関するアンケート」を実施し、134 人から協力を得ることができた。¹

¹ 「書道演習 I~IV」の履修学生の中から無作為に抽出した者である。本学では、書道演習の開講にあたって、受講生の実技経験年数や書写書道への興味関心をもとに上級・中級・初級の 3 つのクラスに編成し、1 年後期より 3 年前期までの 2 年間に渡って書写の理論と実技を扱う授業を開講している。134 人の学年、性別、実技レベルの詳細は、「書字に関する

調査内容は、楷書の基本点画の9種²（横画・縦画・転折・左払い・右払い・右上払い・点・そり・曲がり）をそれぞれ半紙に書いてもらい、その際の筆の動きをビデオで撮影することによって、用筆分析に用いる動画サンプルと用筆資料（半紙）を収集した。また、動画撮影とともに行ったアンケート調査では、次の4項目について、選択式によるものに自由記述を加えた形式で回答してもらった。

- ①書字や日常生活における利き手 ②基本点画についての意識
 ③毛筆・硬筆・その他の筆記用具の使用 ④縦書きと横書きの使い分けとその割合

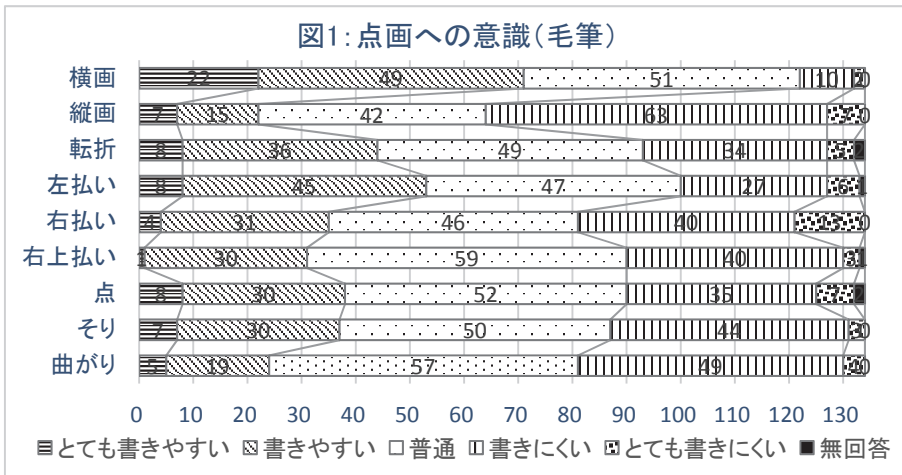
本研究では、動画サンプルと用筆資料（半紙）の分析結果にアンケート調査の中の「②基本点画についての意識」への回答を照らし合わせながら、それぞれの点画への意識と実際に毛筆で書く際の用筆の傾向との相関性について探っていきたいと思う。

2. 書字に関する調査の結果とその分析

(1) アンケート調査からみた基本点画への意識とその分析

①基本点画全体を通してみられる意識と傾向

漢字を構成する基本点画である「横画・縦画・転折・左払い・右払い・右上払い・点・そり・曲がり」の9種について、毛筆で書く際の意識について「とても書きやすい・書きやすい・普通・書きにくい・とても書きにくい」の5段階で評価してもらった。また、それぞれの点画を書く際に思うことや気を付けていることについて自由記述してもらった。9種の基本点画を毛筆で書く際の意識についてまとめたのが下の図1である。各点画の評価項目ごとに示した数値は、男子学生と女子学生を併せた回答人数を示したもので、無回



る調査をもとにした国語科書写における用筆についての一考察(1)」を参照いただきたい。
² それぞれの基本点画は、標準的な形状のものとした。始筆や終筆、送筆方向などの違いから何種類か形状がある次の点画については、縦画は終筆を強く止める縦画（鉄柱）、転折は横（水平）方向から縦（垂直）方向の折れ、点は右下方向へ短く送筆する点、そりは右下方向へと弓なりに引くそり（戈法）に限定して調査を行った。

答であったものも含めて、各点画の回答総数は134人である³。

では、図1の結果をもとに、各点画への意識について見ていきたい。なお、これ以降、それぞれの点画への書きやすさと書きにくさに関する分析は、5つの評価項目別に細かな数値を示す必要がある場合を除いて、

書きやすさ・・・「とても書きやすい」「書きやすい」を合算した数値

書きにくさ・・・「とても書きにくい」「書きにくい」を合算した数値

というように、2項目を合算した数値をもとに考えていくこととする。

まず、「横画」について見てみると、「とても書きやすい(22人)」「書きやすい(49人)」と回答した者の合計が71人(約53%)であり半数以上が書きやすさを感じている。書きにくさを感じている者は、「とても書きにくい(2人)」「書きにくい(10人)」を合わせた12人(約8.9%)と僅かである。これに対して、「縦画」を毛筆で書く際に書きやすさを感じているのは、「とても書きやすい(7人)」「書きやすい(15人)」を合わせた22人(約16%)であるが、書きにくさを感じているのは、「とても書きにくい(7人)」「書きにくい(63人)」を合わせた70人(約52%)と半数以上が書きにくさを感じている。このように、「横画」と「縦画」への意識は対称的で、9種の基本点画中、書きやすさを最も感じるのが「横画」で、書きにくさを最も感じているのが「縦画」と正反対の結果となっている。

次に、この横画と縦画が直接連続して書かれる複合画の「転折」への意識を見ると、書きやすさを感じている者は44人(約33%)、書きにくさを感じている者が39人(約29%)と書きやすさを感じている者の方が若干多めではある。しかし、普通という者が49人(約37%)あり、書きやすさ、書きにくさ、普通のいずれも約3割前後と、三分している。このことからすれば、どこかに大きく偏ることのない平均的な傾向が見られるものといえる。⁴

このほか、「左払い」においては、書きやすさを感じているのが53人(約40%)で、書きにくさを感じているのが33人(約25%)と書きやすさへの意識の方が高くもたれているようである。しかし、これ以外の点画に目を向けると、「曲がり」では書きやすさ(24人、約18%)より、書きにくさへの意識(53人、約40%)の方が高く、「右払い」においても同様に、書きやすさ(35人、約26%)に対して、書きにくさ(53人、約40%)の方が高くなっている。残りの「そり⁵・右上払い⁶・点⁷」においても、30%程度の者が毛筆で書く際に書きにくさを感じていることが分かる。

このように、「横画・左払い・転折」の3種においては書きやすさを感じ、「縦画・曲がり・右払い・そり・右上払い・点」の6種においては、書きにくさを感じる者の方が多いとなっている。この結果からすると、点画の書き進められる方向が、横か縦か、左か右かや、折れ曲がりの変化が右上か左下のどちらで行われるかによって、毛筆で書く際に抱く意識

³ 性別による差異や硬筆・毛筆別に見られる特徴については、別稿「書字に関する調査をもとにした国語科書写における用筆についての一考察(1)」を参照いただきたい。

⁴ これ以外に無回答が2人(約1%)ある。

⁵ そり…書きやすさ(37人、約28%)、書きにくさ(47人、約35%)

⁶ 右上払い…書きやすさ(31人、約23%)、書きにくさ(43人、約32%)

⁷ 点…書きやすさ(38人、約28%)、書きにくさ(42人、約31%)

が正反対になっている。しかし、こうした意識の違いは、書き進める方向や、方向を変える位置が違うだけで起こるような単純なものではないだろう。

次からは、こうした点画への意識は、何が影響して起こっているのか、実際に書かれた用筆資料（半紙）の線や、自由記述してもらった内容を分析していくことにより、その要因について考えていきたい。

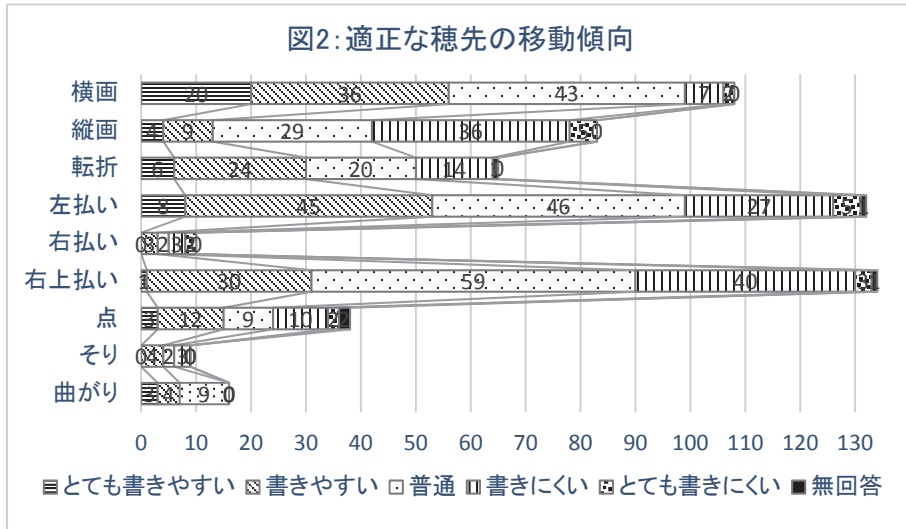
②それぞれの基本点画にみられる意識と穂先の移動傾向

前項で見たとおり、点画を書く際に抱く書きやすさや書きにくさといった意識は、点画によって大きな違いが見られた。こうした意識は、実際に点画を書くこととどれ程相関しているのだろうか。「書きやすい」という意識がもたれている点画を実際に書いた場合は、適正に書くことが出来る率が高くなり、「書きにくい」といった意識がもたれている点画を書いた場合には適正に書くことが難しくなるようなことが起きるのだろうか。そこで、134人に書いてもらった9種類の用筆のデータ 1206例（動画データとその動画撮影を行う際に書いてもらった半紙）について、始筆・送筆・終筆での用筆や形状などを分析し、適正に書かれているか調査してみたところ、適正な用筆で書かれているものは1例もなかった。すべての用例において、始筆から送筆、終筆へと書き進める間に、何らかの点で不具合を起こしているものばかりであった。

書写の適切な用筆においては、始筆では、おおよそ45度で入筆を行うことが望まれる。この入筆時の筆圧は、縦画や左払いのような強い筆圧をかけるものと、右払いや点のような、穂先部分に弱い筆圧をかける程度とするものなど、点画によって異なり様ではない。そのため、始筆部だけを取り上げてみても、それぞれの点画に適した入筆が出来るようにすることは、なかなか難しいものがある⁸。ましてや、どの点画においても、始筆から終筆へと至るまでの方向や筆圧の変化を、常に安定して適正に書くことが出来るようにすることはとても大変なことである。こうしたこともあってか、今回調査した1206例の中には、紙に入筆して（始筆）から最後に紙から筆が離れる（終筆）まで、不具合なく書くことが出来ているものがなかったのであろう。そこで、始筆部での入筆角度が45度よりも緩かったり、急であるという程度の不具合はあるものの、その後、送筆から終筆までは適正に書けているものを探したところ、左払いを書いたものの中に、僅か5例だけ見つけることが出来た。いかに、点画を適正に書くことが難しいかが窺われるところである。しかし、意識と用筆との関係についての分析を進めるためには、このわずか5例だけでは用例不足である。そこで、今度は、適正な用筆で書くためには絶対必要となる条件である穂先の移動について焦点をあてて分析を行ってみた。すると、9種の点画それぞれにおいて、穂先が適正な位置を通過して書くことが出来ていたものは、次頁のグラフ（図2）のような結果となった。

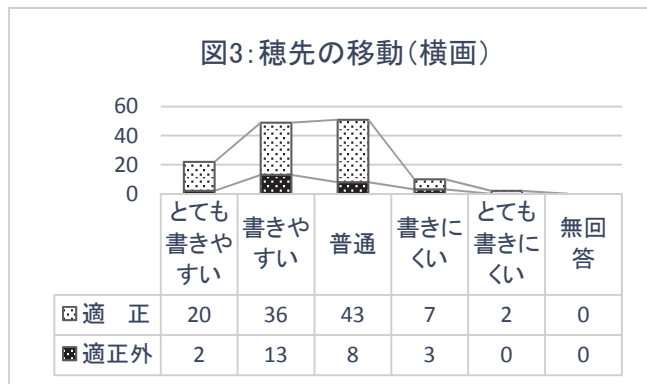
この結果からすると、右上払いでは134人のすべて（100%）が、左払いにおいても132人（約99%）が適正な穂先の移動で書くことが出来ていることが分かる。横画においては108人（約80%）、縦画では83人（約62%）と半数以上が、また、転折では半数近くの65人（約

⁸ 始筆部の分析については、別稿「国語科書写における毛筆での書字に関する一考察 —— 始筆の傾向と用筆との関連性を中心として ——」を参照いただきたい。

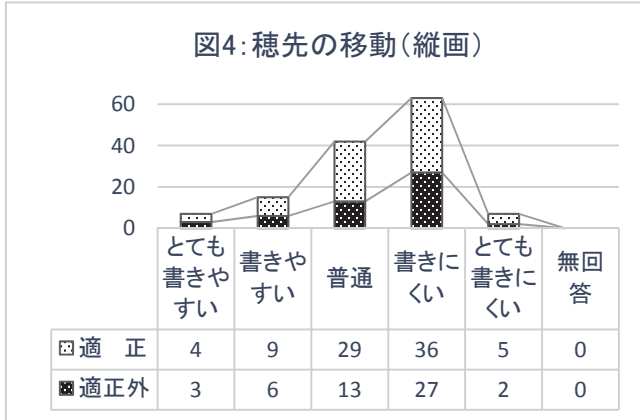


49%)が適正な穂先の移動を行えている。しかし、点では、適正な穂先の移動が出来ている者は38人(約28%)と3割にも満たず、曲がりでは16人(約12%)、右払い10人、そり9人(どちらも約7%)と順に少なくなる。こうした傾向について、もう少し細かく分析し、点画への意識とどれ程の相関性があるか探るために、改めて、穂先の動きが適正であった者と適正外であった者がどれくらいあるか、点画ごとにグラフにしてみた。

まず、毛筆で書く際の意識調査(図1)において、9種の基本点画の中でも、最も書きやすいとされた横画について見てみたい。図3を見てみると、横画においては、適正な穂先の移動が出来ている者が、「とても書きやすい」「書きやすい」「普通」のところに多く分布していることが分かる。そのため、一見すると、書きやすいという意識をもっている者の方に、穂先の移動が適正に出来ている者も多くいるように見える。しかし、「書きやすい」と感じている者と「普通」と感じている者の中で、適正に穂先の移動が出来ている者がどれ程あるか、それぞれの比率を比べてみると、前者では約73%(49人中の36人)であるのに対して、後者においては約84%(51人中の43人)となっていて、後者の方が約9%も高くなっている。意外にも「書きやすい」と感じている者より、「普通」という者の方が、より適正な穂先の移動が出来ている率が高くなっているのである。



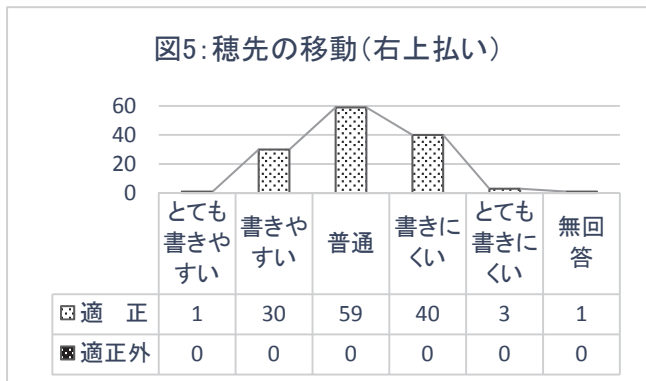
では、逆に、最も書きにくいと感じられている縦画ではどのような傾向が見られるだろうか。今回の調査では、縦画では、134人中の70人と約半数の者が書きにくさを感じているという結果であった。しかし、穂先の移動においては、適正外の移動であった者は約38%の51人とどまり、約62%にあたる83人は適正な移動で書くことが出来ていた(図4)。



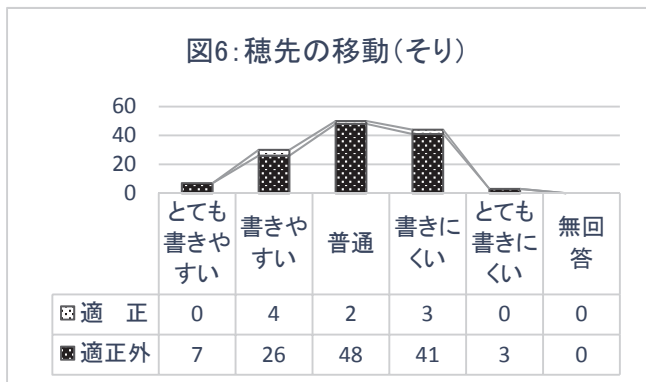
書きにくさを感じている者が多い縦画だが、穂先の移動を見ると、適正に出来ている者の方が約24% (32人) も多いことが分かる。そして、図4を見ると、5つの評価項目全てにおいて、適正と適正外が混在していて、どの項目の内訳を見ても、適正な穂先の移動が出来ている者の方が多くなっているのが分かる。特別、「書きにくい」や「とても

書きにくい」の項目の方に適正外の移動となってしまっている者が偏って多くいる訳ではないのである。こうしたことからして、書きやすさや書きにくさといった意識と穂先の移動の適正・適正外との間には、あまり相関性がないように思える。

そうした点は、右上払いやそりの分析を見てみるとより明確に表れている。右上払いにおいては、134人全員が適正な穂先の移動で書くことが出来ていた。しかし、図5を見てみると、右上払いでの分布では1人無回答の者があることを除いて、それ以外の者は、5つの評価項目の全てに分かれて分布している。そして、書きやすさを感じている者(31人)よりも、書きにくさを感じている者(43人)の方が多くいる状況にある。それにもかかわらず、134人全員が適正な穂先の移動が出来ているのである。



また、図6を見ると、そりでは、適正な移動が出来ていた者は9人(約7%)のみで、それ以外の125人(約93%)は適正外の動きとなっている。そりは、9種の点画の中で最も適正な穂先の移動が出来ていなかったものである。このそりにおいても、5つの評価項目の全てにおいて適正外の動きであった者の分布が見られ、特別、書きにくさを感じている者の方に多く偏って分布している訳ではないことが分かる。



以上のことからして、「書きやすい」「書きにくい」という意識に連動して、穂先の移動が適正に行われる傾向が強くなっ

たり弱くなったりする訳ではないことが分かるだろう。書きやすさへの意識と、穂先の移動が適正か、適正外であるかについては、直接的な相関関係は見られず、「書きやすさ」＝「適正な穂先の移動」といった具合に、単純に結びつけることはできないのである。

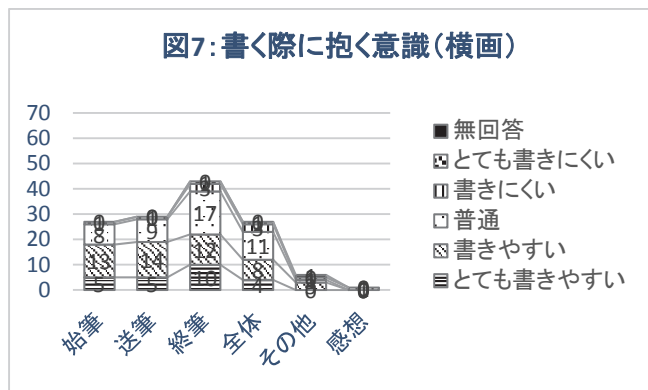
③点画を書く際に抱く意識とその要因

前項まで見てきたように、毛筆で点画を書く際の意識と、実際に書く際の用筆との間には直接的な相関性はないことが分かった。そこで、ここからは、書く際の意識がどのようなことがもととなって起こっているのか、それぞれの点画を書く際に、思うことや気を付けていることについて自由記述してもらった意見をもとに考えていきたい。

分析の方法は、記述された内容が、点画を書く際の「始筆」「送筆」「終筆」や点画の「全体」のどこに関わることなのかについてまず分類を行い、その上で、どういった点について目を向けている意見なのかを細かく分析していく。なお、用筆に直接関わらない意見は「その他」とし、書く際の気持ちを述べているようなものは「感想」として分類をした。調査対象とした134人の中には、9種の点画すべてに回答するのではなく、一部を未記入のままとしていた者もあった。また、逆に1人の者が、1つの点画に対して、複数の内容を記載しているケースもあった。そうした場合は、内容ごとにそれぞれ別の回答として分類することとした。そのため、それぞれの項目の数値は、回答者数を示すのではなく、記載された内容ごとに、それぞれ1件として扱い、その数を合算したものを件数として示すこととする。グラフにおいては、意見内容をより詳細に分析出来るようにするため、それぞれの項目を「とても書きやすい」から「とても書きにくい」までの5つの評価別に区切って数値を示している。

ア、運筆にともなう筆圧の変化が少ないもの（横画・縦画・転折）

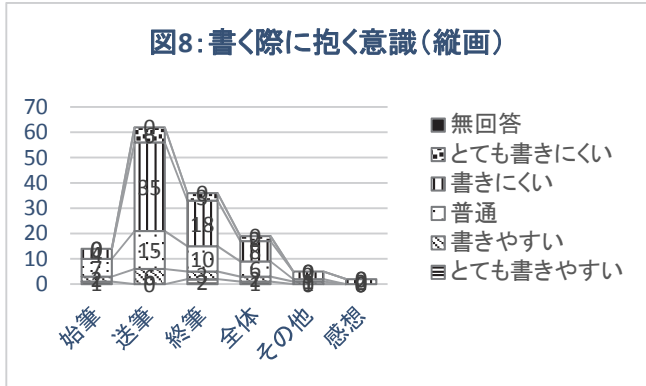
横画を書く際に抱く意識（図7）は、始筆・送筆・終筆のそれぞれの部分について向けられている。始筆に関しては27件ある中で、細かな点に触れているものは、「筆の入り方を斜めにするように意識している」「入るときは45°」といった入筆の角度に関するものが僅か2件あるのみである。送筆に関するものは、



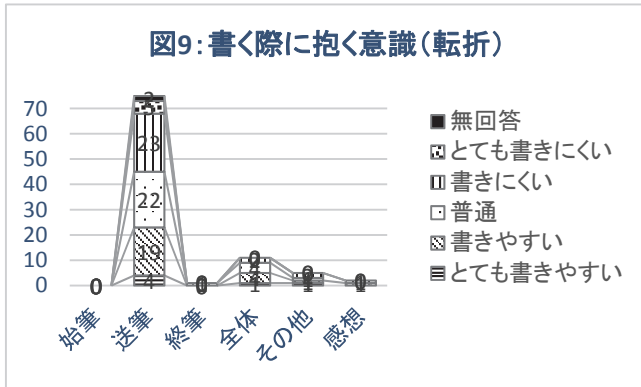
ほとんどが「右上がりになるよう気をつける」といった角度に関するものであるが、「アーチを描くように」とか「長めの横棒は少し反らす」といった形状への意識も2件見られる。終筆についての意識が最も多いが、「しっかりとめる」とか「とめの形をきれいにする」というような大まかな意識がほとんどで、「最後のとめで下にはみでないようにしている」といった形状についてや、「とめる時にきれいに角が出るように力を入れる」というような、

筆圧の加え方などの細かな点にまで至る記述は、この2件だけである。これ以外に、点画全体に関わるものが26件ある中に、「筆先や力加減を気をつける」「毛先がまっすぐ同じラインをとるようにしている」「筆の角度をキープする」といった用筆への意識を窺わせるものが10件ほどある。その他には、「たてかくよりも少し細く書く」「横画同士が平行になるように」という、他の点画との関係への意識も見られる。このように、横画では、始筆・送筆・終筆などのほか、点画全体への意識などさまざまなところに意識が向けられているようではあるが、点画を書くための用筆についての意識は一部に留まっているようである。

次に、縦画を書く際においても、始筆・送筆・終筆などのほか、点画全体への意識がもたれていることが分かる(図8)。中でも、送筆に関する意識が最も多いが、その内容は、「真っ直ぐ書くよう気をつけてもなぜかなめになる」といった意見に代表されるように、真下へ



と曲がらずに書くことに意識が向けられている。始筆に関しては、筆の入れ方に気を配っているようだが、「筆をおく角度に気をつけている」「斜め45度で筆を入れる」という具合に入筆角度まで触れた意見は2件しかない。終筆部分への意識は、「最後のとめがうまくできない」「どうしても丸くなってしまふ」という終筆の形状が整わないことや、「書き終わりの辺りの形がどうなれば正しいのかよく分からない」「流すのか止めるのか」と、止めにするか払いにするかといった終筆の処理について迷う意見も見られた。点画全体への意識は、「筆の角度をキープする」「筆先の位置」といった、運筆する際の筆の動きについて目を向けたものも6件ある。その一方で、「最初に筆をおいてからどう動かすのが良いかあまりよく分かってない」と困惑する意見も見られる。また、その他として、「手や指を体から遠くに伸ばすことに違和感がある」「手が震えて書きにくい」といったように、不安定な執筆の態勢からくる書きにくさについて触れるものもあった。



横画と縦画が連続して書かれる複合画である転折(図9)について見てみると、一気に送筆部分に意識が集中してくる。折れの部分について、「強くカクツとしすぎてしまう」とか「丸みを帯びた角にならないようにする」という具合に、それぞれの書き振りが形状に与える影響について注意をはらっているもの

があるほか、「折れるさいの筆圧の調整が難しい」「一度しっかりと止まってから折れるよ

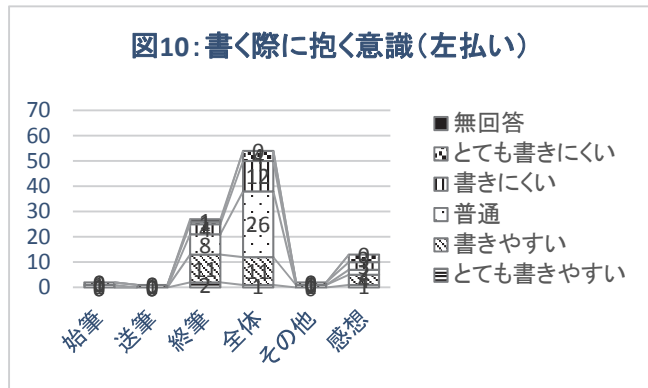
うにしている」「横→止める→向きを変える→縦というように、1つ1つやっているかんじ」といったように用筆法にまで目を向けているものが20件以上も見られる。

また、その他の意識には「なぜか縦画も上手く書ける気がする」という回答も1件あり、転折の際にしっかり止まったことにより、縦方向へ方向転換した後の運筆が安定しやすくなることを示唆するものもあった。

イ、運筆にともなう筆圧の変化が大きいもの（左払い・右払い・右上払い）

左払い・右払い・右上払いの3種は、左や右への移動とともに、筆圧も変化させながら書き進められる。それぞれの点画を書く際に思うことや気を付けていることも、そのような筆圧を調整しながら筆先をまとめるようにして払っていく用筆への意識についてのものが多くなっている。

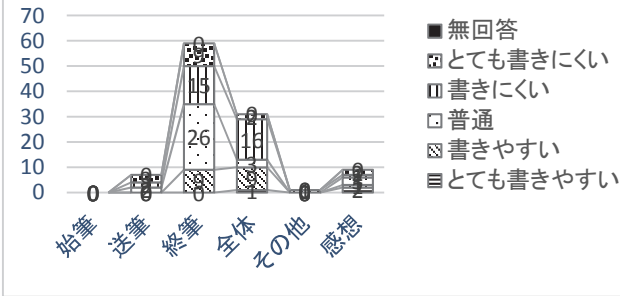
左払い（図10）では、「力を入れすぎたりして太さがおかしくならないように」とか「筆を徐々に抜いていく感じ」「あせらずに筆の先に集中する」など、点画全体における用筆についての意識が高いようである。しかし、形状を整えることについては、「どこから払いに入っていく



か」といった筆圧を変化させ始める目安がよく分からないという意見や、「字と手が重なるので字のバランスがとりにくい」といった運筆の際の見え方に問題を感じているものもある。また、「かすれやすい」「筆先がぼろぼろしないようにゆっくり書く」など、運筆の際の速度にも気を付け、線質が乱れないようにしている様子が窺える。こうした慎重な運筆への意識が影響するのか、「どうしても長くなりがち」と、書いている間につい長さが伸びていってしまうという問題も起こっているようである。終筆部分に関しては、「終筆へ向かうときの力の抜き方」や「払いをなめらかに」との意識が特に強く、「最後に穂先が細くなるように」や「払った先がバラけないようにする」「払った筆先がきれいになるよう筆を整える点」など、穂先のまとめ方にも意識を向けているようである。そして、中には、「払った後もつなげていくように急に止まらない」というように、筆勢を生かした運筆への意識をあげたものもある。しかし、筆圧の変化を上手く調整し、スムーズに運筆することはなかなか難しいものがあり、「あまり払えてないことが多い。とめてしまう」や「穂先が詰まる感じがある」というような、最後まで上手く運筆することができないことに困惑している様子も見られる。

次に、右払い（図11）について見てみると、点画全体への意識よりも、終筆での払いの部分に意識が集中して向けられているようである。それは、終筆部において、「一度きちん」と止めてから払うようにしている」というような、払いへと移行する際に一旦止まる運筆

図11:書く際に抱く意識(右払い)

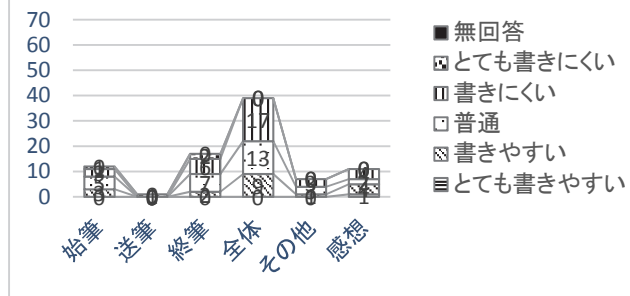


の仕方に向けられたものが多く見られる。しかし、「最後のとめからの払いを横にする」とか、「先がかすれるときがあるので徐々に力を抜く」といった方向や筆圧の変化については、あまり意識を向けることが出来ていないようである。そして、点画全体への意識について見てみると、「線の太さがまちまちになっ

てしまう」や「入るときは細すぎるのに最後は太すぎる、変な形」「形が作りづらい」などの意見があり、形状が上手く整わないことに困惑する様子も見受けられる。点画全体への意識でも、終筆部分への意識と同様に、「だんだん太くしてきちんと止めてから、力を抜いて払う」というような複雑な用筆に対する意識をあげたものは少ないようである。また、右下へと運筆するところから、「腕を引く動作がある」「手首がつかまる感じがするのでゆっくりかく」と多少の書きにくさを感じているものがあったり、「右は腕を動かすスペースがあるからしっかり丁寧にぬくようにしている」と大きな動きで運筆出来ることを好意的に捉えているものもあるようだが、「左払いよりもゆっくり書いている」といった意見もあるように、総じては速度をゆっくりと丁寧に書くことを心掛けている様子を窺い知ることが出来る。この他、「終着点を意識しながら力の強弱をつけることができる」との意見もある。これは、「徐々に太くして、いったん止めてはらう」という意識に見られる、右払いの運筆リズムからの影響があるのではないだろうか。右払いは、始筆から右下方向へと送筆して一旦止まり、その後終筆へと移行するといった流れで書き進められる。そのため、どこからどこへと移動していけば良いか、進行方向と通過する地点の目安がつけやすくなることが効果的に働いているものと考えられる。しかし、「筆の先の向きに気を付けている」といった用筆上の注意点に触れているのは1件だけしかなく、穂先の移動にまで意識を向けることができていないものはここでも少ないようである。

右上払い(図12)においては、点画全体のほか、始筆と終筆への意識が一部見られる。しかし、「いまいち理想の形がわからない」という意見に代表されるように、点画全体への意識は一樣ではなく、いろいろな内容に目が向けられている。それらの例を以下にあげる。

図12:書く際に抱く意識(右上払い)



- (形状に関するもの) ・ムダに長くなりすぎたりする ・短くなる ・かすれる
- (角度に関するもの) ・角度が難しい ・払う角度に気をつける

- 〈筆圧に関するもの〉 ・徐々に力を抜いて筆をはなしていく ・力を入れすぎない
- 〈太さに関するもの〉 ・太くなりすぎてしまう ・細さが変わるように
- 〈速度に関するもの〉 ・勢いのある程度維持する ・ゆっくりはねあげる
- 〈穂に関するもの〉 ・穂先がバラバラになってしまうことが多い
- ・最後まで筆先を意識する

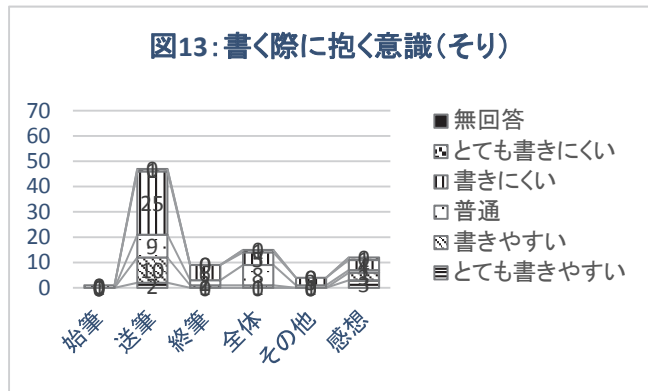
〈その他〉 ・流れて書きやすい ・たまにつかえる ・上にあげるときに手首を使う

このような、様々な意識が混在した状況は、他の点画では見られないものである。だが、終筆部分については、「筆先をそろえる」や「最後がキレイな△の三角になるように」など、穂先をまとめていくことに意識をはらっている点は、前掲の左払いや右払いと同様の傾向が見られる。そして、始筆部分については、「書き始めに力が入る」とか「一旦止めて力を込めて上に払っている」といった具合に、入筆後にしっかりと止めるといった意識が働く傾向があるようである。中には、「一度とまって、はねあげようとしている」という意見もあり、実際に書かれた用筆のサンプルを見ても、レ点のように一度止まった後で折れを生じてはねた書き振りになってしまうものも見られる。また、こうした始筆部における強い力や、右上へと押し上げるような意識が影響するのか、「半紙に筆がくっついて、半紙ごともっていかれる」「紙がくちやつとなることがあるので困る。右上払いがあるときは、紙をしっかりとおさえている」といった半紙を押さえることに注意が向けられているのも右上払いに限っての特徴である。

ウ、運筆にともない筆圧と穂先の移動が複雑に変化するもの（そり・曲がり）

そりと曲がりの用筆においては、始筆の際は、線の左側にあった穂先が、点画を書き進めていくうちに、徐々に内側へと移り、そして、終筆前の止めへ至るころには、上側へと移動するといった共通点がある。両者の違いは、送筆の際に、弓なりにしならせてそるよう書くか、縦から横へとL字状に方向を変えていくように曲げていくかといった運筆の違いとその結果生じる形状の違いであろう。

まず、そり（図13）を書く際に抱く意識を見てみると、「そりの調節が難しい」といった意見があり、「どのくらいそったらいいのかわからない」とか「角度や太さ、長さをどれくらいにするかが難しい」というような、送筆部におけるそりの形状に対する意識が多く見られる。しかし、「しなりができるように」「曲がりにならないように」などの運筆上の注意点に意識を向けることが出来ているものや、「筆のもっていく方向を気をつける」「きれいにそることができないので最初にしっかり筆をおくようにしている」といった、用筆法にも注目出来ているような意見は少数である。



曲がり（図14）においても、送筆部への意識が中心である。

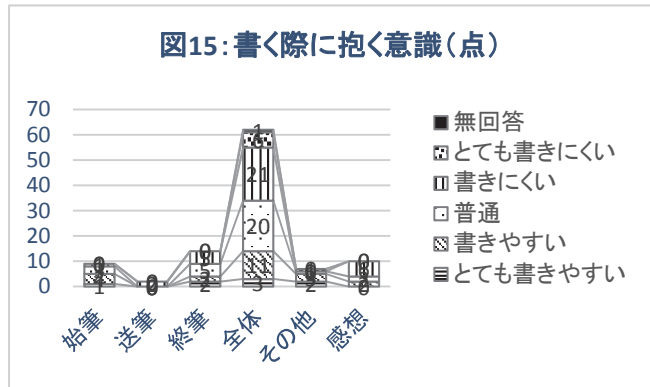
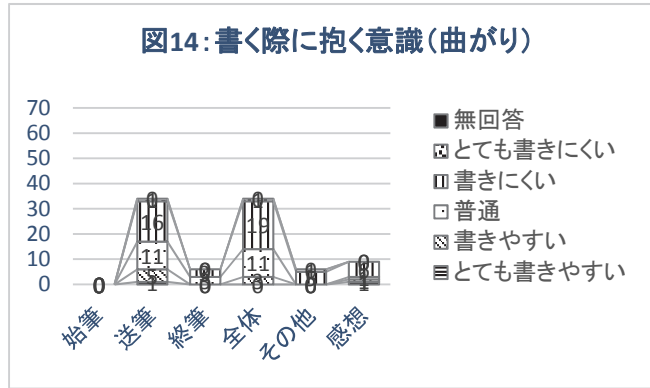
「うまく方向を変えられない」や「縦向きから横向きへの移動がむずかしい」といった、単純に運筆の途中で方向転換する動きが難しいとするものが多い。だが、「曲がり終わった後つづけて書くのが難しい」とか、曲がりの図とともに「ここが上がるように」と書き込み、曲がった後の横画を少し仰ぐように書く用筆（浮鶯の筆法）への意識をあげるものもあった。この他、「そりと混同しないようにきをつけている」といった具合に、送筆部での曲がる形状への意識が目立った。「曲がる時に力を少し抜くこと」「太→細→太となるようにしている」というような、筆圧の変化にも注目しているものはごく一部であった。

このように、そりや曲がりを書く際においては、送筆部の形状をどのようにするかといったところに意識が集中しているようで、始筆や終筆への意識は低く、穂先の動きや筆圧の変化といった用筆への意識もあまりもたれていないようである。

エ、短い運筆の中で筆圧が大きく変化するもの（点）

点（図15）は、他の画に比べて小さいことから、「短いので失敗しにくいです」「筆をおくだけで楽」といった意識が見られる。しかし、逆に「点は他の点画に比べ短いから、筆を上げるタイミングや筆の動かし方が難しい」と、小さいがゆえの書きにくさをあげるものもあった。始筆部への意識では「きれいな形になるように穂先をととのえてから書く」、終筆部では「点のおしりがきれいに丸くなるよう点を打つのがむずかしい」といった意識があげられているが、点は短い運筆で小さな形状に書かれることもあ

つてか、こうした始筆・送筆・終筆の各部分について、別々に分けた捉え方をしているものは少ないようである。多くは、「点の大きさがよく分からない」とか「大きさや太さ、角度など、小さいからこそ調整が難しい」といったように、点画全体へ向けての意識がもたれている。中でも、「筆を置いただけの小さいものにならないようにする」といった大きさについてや、「細長くなってしまう」「長さが長くなりすぎないように太くなりすぎないように」とか「のっぺりしてしまう」「ぼさぼさになってしまう」「ただの丸にならないように」



といった形状への意識がほとんどである。

このように、点画を書く際に意識を向ける箇所は、点画の形質に応じて違いがあることが分かった。横画と縦画のような、運筆の方向が右や下といった一方向へ書き進められるもので、筆圧の変化もそれほど大きくないものにおいては、始筆や送筆、終筆および点画の全体など、広い視点で捉えられている。そして、それぞれの部分において、形状や筆圧、用筆などさまざまなところに目を向けることが出来ているようである。しかし、転折・左払い・右払い・右上払い・点・そり・曲がりといった、運筆中に方向とともに筆圧の変化も伴いながら書き進められる点画においては、そうした複雑な変化の結果形作られた形状への視線が優先して働くようである。殊に、転折・そり・曲がりにおいては、方向を変化させる送筆部分への意識が多く、左払い・右上払いでは、点画全体の形と筆先をまとめながら払っていく終筆部への意識が多く見られる。右払いでも同様の傾向が見られるが、中でも、送筆から一度止まった後の、払っていく終筆部分への意識が特に多くなるようである。また、点は、短い運筆で小さく書かれるため、始筆・送筆・終筆の境目を意識しづらいこともあつてか、それぞれを区別せず、点画全体の形に意識が向けられる傾向が見られる。

転折・左払い・右払い・右上払い・点・そり・曲がりといった多くの点画においては、見た目への視線が先に立つことから、形状以外の要素へはあまり意識が向けられておらず、そういった偏った観点の中で、書きやすさや書きにくさが判断されてしまっているようである。こうした一部の要素ばかりに偏重するのではなく、あらゆる観点を通して総合的に判断出来るようにすることが大切である。そのためにも、正しい点画への理解を深めていくことが必要なのである。

3. 今後の研究と指導法の開発に向けて

毛筆で書く際の書きやすさや書きにくさといった意識は、実際の書き振りが適正であるかどうかといったことと関係しているのではなく、どちらかという、各点画の形質から抱かれる特定の観点をもととして判断されていることが分かった。しかし、点画に対する認識は、あくまでも、個々の捉え方によるものであるため、一概に書きやすい、書きにくいといっても、その判断材料となる観点や基準がまちまちであり、同一の評価として扱うことに問題があるようなものも見られる。例えば、次にあげる2人（A・B）の右払いに対する意識について見てみると、大きな違いがあることが分かるであろう。

A・・・書きやすい

「かき方がよくわからないです（終筆での筆先の扱い）。でもかくのはすきです。」

B・・・とても書きにくい

「最後がなかなかきれいにいかない。徐々に太くしていくのが難しい。筆の向きに気をつけている。」

Aは、点画への理解が充分ではないにもかかわらず、好意的な捉え方をされていて、書きやすいとの意識をもっている。これに対して、Bは、終筆の形状や筆圧の変化、穂先の動きといった用筆の細かなところまで注意を向けている。しかし、とても書きにくいという

意識をもっているのである。これは、正しい点画への理解と自らの現状の把握が出来ているからこそその判断であろう。このように、本来ならば、書きやすさや書きにくさへの意識は、点画の形質と適正な用筆を理解したうえで、自らの書き振りを的確に分析することを通して、適切に判断することが求められるところである。そういった判断力を養うためにも、点画への理解を深めるための指導が必要である。まずは、穂先の移動や筆圧の変化の重要性について気づかせることが先決である。近年、広く普及してきているタブレット型端末やスマートホンのビデオ機能を活用して、練習中の筆の動きを動画撮影し、その再生を見ながら、自らの用筆について振り返り学習を行ったり、他の学生とお互いの用筆について話し合いを行うなど、客観的に分析を行うことにより適正な用筆への理解を深めていくことが有効であろう。そうした学習は、最初に右上払いと左払いを用いて行うことが良いのではないだろうか。この2つの画は、始筆から終筆まで書き進めていく際に、進行方向に対して自然に筆を押しつけ気味に動かしていくことから、穂先の位置を左上側に維持したまま運筆させやすいものと思われる。それは、第2章の穂先の移動の分析(図2)でも見たように、ほとんどの者が適正な穂先の移動を行うことが出来ていたことから明らかであろう。そこで、最初は、右上払いと左払いを書きながら、穂先の移動や筆圧の変化に目を向けさせるところから始めていくとスムーズに学習に入れて良いだろう。そして、次第に運筆の角度を変えていき、右上払いから横画へ、さらには右払いと点へと進め、左払いからは縦画へと進めていくようにする。その後、転折、曲がり、そりへと段階的に学習を進めていくことによって、一つひとつの点画への理解を徐々に深めていくこととなり、用筆についても確実に定着させていくことが出来るようになるのではないだろうか。

今回は、穂先の動きや点画を書く際に思うことの分析を通して点画への意識について考察を行ってきた。しかし、始筆から送筆、終筆へと至るまでのより細かな用筆の分析からの考察をするまでには至ることが出来なかった。こうした点は今後の課題として、さらなる用筆の分析を続けていくことにより、点画への意識と用筆との関係性について明らかにするとともに、それらを活かした効果的な指導法の開発についても研究を進めていきたいと思っている。

(注)本研究は、文部科学省科学研究費助成金(基盤研究C:衣川彰人、課題番号25381251)による助成を受けている。

(2018年9月25日受理)